京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

ブラフマニズムとヒンドゥイズム―南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性

Brahmanism and Hinduism: Change and Continuity in South Asian Society and Religion

2. 研究代表者氏名

藤井 正人

Fujii, Masato

3. 研究期間

2016 年 04 月 - 2019 年 03 月

4. 研究目的

ブラフマニズム(バラモン教)は、ヴェーダ文献に基づく宗教儀礼と生活・社会規範を含む古代インドの支配的宗教体系である。その後の仏教やジャイナ教など、ヴェーダに基づかない非正統派の宗教の成立と前後して、ブラフマニズムの内部および周辺から、新しいタイプの信仰形態、宗教思想、宗教儀礼をもつヒンドゥイズム(ヒンドゥー教)が形成されていった。しかし、ブラフマニズムはヒンドゥイズムへと移行・解消したのではなく、両者はインドの社会と宗教の二つの基軸として、現代に至るまで並存し、混淆し、互いに影響を与え合ってきている。本研究は、ブラフマニズムとヒンドゥイズム、およびそれらと距離をおきながらも共存してきたその他の宗教との通時的および共時的関係に関する研究を通して、南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性を解明することを目的としている。

5. 研究成果の概要

本共同研究の課題である「ブラフマニズムとヒンドゥイズムー南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」を様々な射程からアプローチするために、3年間の研究期間を全6クールに分け、クールごとに以下のテーマを設定して研究を行った:第1クール「知の変化と発展」、第2クール「禁欲・出家・苦行」、第3クール「神話・説話・表象」、第4クール「儀礼・制度・社会」、第5クール「哲学と学問」、第6クール「王権と宗教」。テーマに基づいて、毎月の定例研究会と半年のクール最後のシンポジウムを繰り返し、3年間で28回の定例研究会(報告総数 38)、6回のシンポジウム(発表総数 41)を開催した。今後、研究のまとめのために基盤研究班(C班)として1年間期間を延長して、各クールのテーマをもとに複数巻の論文集として出版する計画である。

6. 共同研究会に関連した公表実績

第1回シンポジウム「古代インド思想における『知』の深化 『知』の拡大」　2016 年 10 月 8 日　京都大学人文科学研究所

第２回シンポジウム「古代インドにおけるアセティシズムの諸相―禁欲・苦行・出家―」　2017 年 3 月 25 日・26 日　京都大学人文科学研究所

第3回シンポジウム「古代・中世インドの神話、説話、表象」　2017 年 10 月 7 日　京都大学人文科学研究所

第4回シンポジウム「古代・中世インドの儀礼、制度、社会」　2018 年 3 月 24 日・25 日　東京大学文学部

第5回シンポジウム「古典インドの哲学と学問」　2018 年 10 月 7 日・8 日　京都大学人文科学研究所

第6回シンポジウム「古代・中世インドの王権と宗教」　2019 年 3 月 23 日・24 日　東京大学文学部

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究では3年の研究期間を半年ごとの全6クールに分け、各クールごとにテーマを設定して定例研究会とシンポジウムを開催する。各クールのテーマとして、一年目は「知」「出家・苦行」、二年目は「神話・説話・表象」「儀礼」、三年目は「哲学・学問」「現代へ／現代から」を予定している。研究成果の公表としては、各クールの最後に公開シンポジウムを開催するとともに、定例研究会での報告とシンポジウムでの発表を踏まえて、各クールのテーマに関して論文を完成させ、複数巻の論文集として出版する計画である。